

異作目間の生産組織化方法

誌名	富山県農業試験場研究報告
ISSN	0386085X
著者	東城, 真治 田口, アキラ
巻/号	13号
掲載ページ	p. 71-72
発行年月	1983年3月

短 報

異作目間の生産組織化方法

——同一作目組織内における相互作用の増加
が異作目間の生産組織化に及ぼす影響——

東城真治・田口吟

1. 緒 言

地域農業の展開には地域内資源（土地、労働力、資本、中間生産物等）を農家にいかにして効率的に配分するかということが大きな課題としてあげられる。また地域内資源の効率的な配分をはかるためには、農家の組織化は欠かすことのできない課題であり、異作目農家間において特に重要であろう。

しかし組織化されている事例が多い同一作目農家同士の場合とは異なり、異作目農家間の連結は個別に行っている事例は少なくないものの、集団・組織化している事例は少ない。例えば星野（1977）は個別的な類型間補完はしやすいが、それをどのようにして集団・組織化するかということが今後の大きな課題であると報告している。

このことから異作目農家間で集団化している事例の分析を通して、個別的な異作目農家間の連結を集団・組織的なものへと促す要因について検討した。

2. 研究方法

富山県砺波市神島地区を中心にして飼料作協業組織（1組織）、稲作請負農家（1戸）及びそれらにかかわった一般稲作農家（25戸）を対象に、聞き取り、アンケート調査等を行った。研究内容については以下のとおりである。

酪農家による飼料作協業組織と稲作農家の連結が、個別的なものから集団的なものに展開してゆく過程を通して、①組織と外部環境②組織と各構成員③構成員間④各構成員と組織外農家（稲作請負農家を含む）等それぞれの関係の変化について分析を行った。

3. 結果及び考察

稲作農家と酪農家の集団的連結には、飼料作協業組織内における構成員の相互作用の程度いかに、

大きな影響を及ぼしていた。このことについて飼料作協業組織の展開過程を通して検討したが、その結果は次のとおりであった。

1) 飼料作協業組織発足前後

A 飼料作組合が発足した要因の主なものとして次の3点があげられる。

- ア. 一足早く発足した同地域内の飼料作組合のひとつが集団転作料の上乗せ等、集団化による有利性を発揮していた。
- イ. 地域内ではほ場整備が盛んに行われ、それに伴う義務転作のほ場を容易に借り得た。
- ウ. ほ場整備の促進によりコンバインが急増し、従来の長わらに代わり切断されたコンバインの排わらを収集する必要があった。

このように各構成員が飼料作組合へ加入した誘因として、集団化による奨励金の上乗せなどの有利性が得られることや飼料作用大型機械が安い利用料で使えること等が主なものとしてあげられる。

また稲作請負農家（B農園）は規模拡大に伴って春、秋の労働ピークが鋭くなり、その緩和対策としてオペレーターの雇用が必要になった。そこでB農園主は同一集落内で親しくかつA飼料作組合の構成員でもあったA₃にオペレーター労働を依頼し、更にA₃を通じてA₂にもオペレーター労働を依頼した。

2) 飼料作協業組織の展開過程時

発足時に比べると、各構成員の飼料作協業組織機能に期待する内容には差が生じてきた。例えば、近所でまとまって借地をし、しかも保有労働力で組み作業が可能なA₁や他構成員と異なり青刈給与を主としていたA₂は個別指向が強く、組合への期待の内容は発足時と変わらなかった。しかしA₃、A₄、A₅にあっては、保有労働力で組み作業が行えないこと等から大型機械オペレーター労働と中、小型機械オペレーター労働及び手作業労働との相互交換等が増加し、ひいては借地の相互交換と、その相互作用も内容、量共に充実していった。

またB農園の臨時オペレーターになったA₂、A₃は、B農園の請負っている水田のいねわら収集や苗代跡田の活用、トラクタの借り受け等、その連結内容も多様になっていた。その他にA₂、A₃はB農園の請負田に堆きゅう肥の施用も行っていたが、肥効のあと効きなど稲作管理の難しさから堆きゅう肥施用を中止した。

3) 現況（昭56）

A 飼料組合内のA₃、A₄、A₅は労働力、機械、借地などの相互交換のみならず、飼料作田、いねわら収

集田の共同利用と、その相互作用を以前よりも内容、量共に充実させ小集団を形成するに至っている。

またB農園との連結はオペレーターになっているA₃との個別的なものではなく、A₃を通してA₃, A₄, A₅からなる小集団との連結に展開している。例えば、A₃と違ってA₄, A₅はB農園と直接的な関係がなく、むしろ借地等で競合させしている。しかしA₃がB農園と個別に行っていたいねわら収集田、苗代跡田、転作田の期間借地のほかトラクタ、ブルドーザの借り受け等は上記のA₄, A₅をも含んだ小集団との間で行われるに至っている。

4) 残された課題

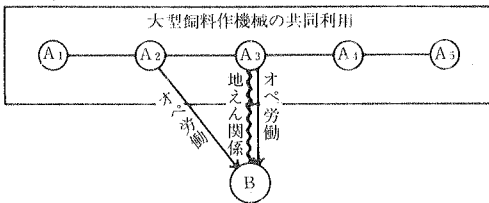
本報告事例の経営間連結は個別的から集団的なものに展開しているが、組織的なものには至っていない。

ただこの事例は異作目間の組織的な連結に発展するための一つのステップをふみ出したものと評価でき、同地域の他の飼料作協業組織の事例をも含めて更に異作目農家間の組織化について検討するとともに、組織化するための必要条件は何であるか追究してゆきたい。

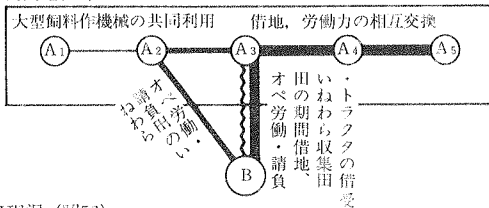
4. 摘要

富山県砺波市における飼料作協業組織と稲作請負農家との連結が集団的になった過程から、その集団的になった要因について検討した。その結果、個別に行われることが非常に多い異作目農家間の連結が集団的なものになるためには、同一作目組織である飼料作組織内の構成員間の相互作用、特に労働力及び借地互換の可能性の大きさいかんが重要であることが確認された。

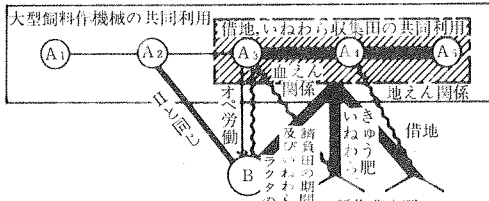
I 発足時



II 展開過程時



III 現況 (H356)



凡例

- : 相互作用でも量、内容共に豊かな場合
- : " 中間的な場合
- : " 少ない場合
- : 酪農家
- : 稲作請負農家
- ~~~~~: 連結のきっかけ
- : 飼料作組合
- ▨: " 内の小集団

図-1 個別的連結から集団的連結への展開

区分	農家間の相互作用の推移	
	飼料作組合の構成員間	左記構成員と稲作農家間
I	大型飼料作機械 (トラクタ、ペレータ等) の共同利用が主である。	B農園は同じ集落のA ₃ にオペレーターを依頼した。A ₃ を通してA ₂ にもオペレーターを依頼する。
II	特にA ₃ , A ₄ , A ₅ 間で労働力や借地の相互交換が増加する。	A ₂ , A ₃ はB農園から請負田の期間借地やいねわら収集田、トラクタの借受等が増加する。
III	A ₂ の個別化傾向が強まる。一方A ₃ , A ₄ , A ₅ における小集団の性格が明確になり、借地やいねわら収集田が共同利用に展開する。	A ₃ とB農園の個別的な連結が、小集団対応へと展開する。その他一般稲作農家群との連結も小集団対応となる。

引用文献

青井和夫ら(1977) 集団・組織・リーダーシップ 培風館: 83~85, 205~206。
 星野亀夫 (1977) 類型別補完による経営規模拡大に関する研究 群馬, 栃木, 埼玉県農試及び農事協定研究成績書: 3~4。
 公文俊平 (1979) 社会システム論 日本経済新聞社: 77~79, 132~133。
 佐藤尚志 (1973) 非公式組織の作用・経営学の基礎知識有斐閣: 136。